

大学生の身体活動量と環境要因について

○高橋亮輔、小山裕三、小川貫、橋口泰武、重城哲、森長正樹、服部英恵、安住文子、沖和磨(日本大学)

身体活動量と環境要因についての研究は、成人および高齢者を対象としたものが多く、大学生を対象に行われた研究はあまり多くない。そこで本研究は、理系学部の大学生を対象に身体活動量と環境要因の関連性を明らかにすることを目的とした。

本研究の参加者は、保健体育（実技）を受講した某理系学部の男子大学生122名である。参加者に本研究の趣旨を説明・同意の後、身体活動量（IPAQ）および環境要因（IPAQ-E）の調査を行った。分析対象者は欠損値のない102名とし、身体活動量は先行研究の算出方法より23Mets・時/週を超える推奨群と不足群とに分類した。身体活動量と環境要因の関連についてロジスティック回帰分析を用いて行ったところ、本研究の参加者において有意な関連性は認められず、別の要因が身体活動量に関連している可能性が考えられた。今後、身体活動量の推奨群と不十分群に関連する要因について調査することが課題である。

ラグビーにおける日本代表とウェールズ代表の防御比較 - 第2報 -

○廣瀬恒平、安ヶ平浩、加部恭史、矢田勝也（国際武道大学）

現在ラグビーの防御において世界トップレベルと言われるウェールズ代表と、日本代表の防御局面の比較調査を行った。その結果、ウェールズ代表の方が①前方でのタックル発生率が高い、②2人目のタックラーのボールヒット率が高い、③ラックに対してオーバーする比率が高い、④攻撃側よりもラックに参加する人数が少ない、⑤攻撃側がラックからボールを出す時間が長い、⑥攻撃側に前進させずに止める比率が高い、⑦トライを奪われて防御が終了する比率が低い、という傾向が見られた。

ウェールズ代表について詳細に分析した結果、①低くタックルに入ることによってタックル成功率が増加する、②2人目のタックラーがボールにヒットすることでタックル成功率が増加する、③タックル成功により前方でのラック発生率が増加する、④前方で発生したラックに対してはオーバー、後方で発生したラックに対してはジャッカルというプレーを選択している、という傾向が認められた。